文化財コーナー 近世の旅日記から

No.375

近世における旅は、現代と異なり、全て徒歩でしたから、一大行事でした。加藤時男先生を中心とする古文書講座の成果として『茂原の古文書史料集　第四集　江戸時代の旅日記』が平成十年（平成十五年改訂）に刊行されていますので、その中から、当時の旅の様子を千葉家の史料で紹介してみたいと思います。

茂原市上永吉の千葉家は、近世以来著名な眼科ですが、代々弥次馬を襲名していました。今回とりあげる「日光山案内記」は表紙に「上総国埴生郡上永吉村、千葉弥次馬、時二十七歳」とあり、千葉家三代慎斎であることがわかります。

「日光山案内記」の特徴は各地の解説が詳しいことです。

日記の最初六月十五日には「茂原村」が出てきますが、「右此所に茂原山妙光寺という萱ふきの七堂がらんの寺あり、十四五丁隔りたれと左木の内ニ五重の塔ハしかと見ゆるなり」と藻原寺の壮大さを記しています。

その後本納・大網を経て田中村で一泊。十六日は横芝から太田村（旭市）で一泊しています。その後銚子に出て、坂東三十三観音の札所である飯沼観音に参詣します。銚子の外川を遊覧して一泊します。翌十八日は利根川を渡り、息栖神社を参拝。大船津まで船に乗り一泊。翌十九日は、朝食前に鹿島神宮参拝。津の宮に出て香取神宮を参拝します。いわゆる鹿嶋・香取・息栖の三社参りを行ったわけです。

その晩は再び利根川を渡り大杉（桜川市）で一泊します。翌二十日はアンバサマで有名な大杉神社を参詣し、霞ヶ浦沿いの土浦に向かいます。そして一気に筑波山麓の北条（つくば市）まで北上します。

翌二十一日は、坂東三十三観音札所の大御堂に参り筑波山を登拝。山内の所々で歌を詠んでいます。その日は宇和曽村で一泊します。翌二十二日は加波山に登拝し、翌二十三日はやはり坂東三十三観音札所の雨引観音を参詣。これも信じられないスピードなのですが宇都宮まで行ってしまいます。

二十四日は、大沢経由今市まで行ったところで、一旦日記の記述が途切れます。

二十五日は、日光山内について詳しく解説しています。さらに坂東三十三観音札所中禅寺に登ります。二十六日の記述はなく、二十七日には石裂山（おさくさん）（鹿沼市）に登拝しています。そこから坂東三十三観音札所の出流山満願寺を拝み、岩船地蔵を経て日光街道沿いに帰ってきます。帰りの記述は極めて簡単です。

以上、坂東札所は必ず訪れていること、鹿島・香取・息栖の三社参りを行っていることが特徴です。また互いに近在にありながら、石裂山の信仰が、同じ火伏せの古峰神社（鹿沼市）よりも盛んであったことがわかります。このように、当時どのような寺社が人気があったかがわかる好史料です。

茂原市文化財審議会委員　菅根　幸裕

問合せ　生涯学習課（9階）
☎(20)1559　FAX(20)1607

文芸コーナー

蚊帳

時女　礼子

夏が来ると祖父母と両親は
各々の部屋に蚊帳を吊った
私はその中が大好きだった
視界が狭くなり両親を最も身近
に感じた
麻の匂いもし特別の世界だった

蚊帳の外には
蚊取り豚の鼻の穴から
煙が出ていた
朝起きると数匹の蚊が畳の上に
落ちていた

秋風が吹く頃に
蚊帳はきれいに畳まれ
又来年の夏を待っていた
少し寂しい瞬間でもあった

◎選評　斎藤正敏

夏が来ると　各々の部屋に蚊帳を吊った。子供時代の懐かしい体験だ。狭い蚊帳の中で家族への親近感を覚え想像力が拡がった。秋風が吹く頃、蚊帳はきれいに畳まれ来年の夏を待つ事に・・・。少し寂しい瞬間であった。懐かしい子供時代の蚊帳体験である。

●偶数月は「俳句・短歌・川柳」を、奇数月は「詩」を掲載しています。
●投稿は楷書でお願いします。作品・氏名にふりがなをふってください。
※詩の原稿送付先（直接選評者へ）　〒297-0032　茂原市東茂原７番地　斎藤正敏宛。
「広報もばらの詩」と朱書きしてください。原稿は30行以内でお願いします。